2022年7月31日  川越教会

丸山　勉

この器に光があふれ

［エフェソの信徒への手紙5章1節～20節]

あなたがたは神に愛されている子供ですから、神に倣う者となりなさい。キリストがわたしたちを愛して、御自分を香りのよい供え物、つまり、いけにえとしてわたしたちのために神に献げてくださったように、あなたがたも愛によって歩みなさい。あなたがたの間では、聖なる者にふさわしく、みだらなことやいろいろの汚れたこと、あるいは貪欲なことを口にしてはなりません。卑わいな言葉や愚かな話、下品な冗談もふさわしいものではありません。それよりも、感謝を表しなさい。すべてみだらな者、汚れた者、また貪欲な者、つまり、偶像礼拝者は、キリストと神との国を受け継ぐことはできません。このことをよくわきまえなさい。

むなしい言葉に惑わされてはなりません。これらの行いのゆえに、神の怒りは不従順な者たちに下るのです。だから、彼らの仲間に引き入れられないようにしなさい。あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています。光の子として歩みなさい。――光から、あらゆる善意と正義と真実とが生じるのです。――何が主に喜ばれるかを吟味しなさい。実を結ばない暗闇の業に加わらないで、むしろ、それを明るみに出しなさい。彼らがひそかに行っているのは、口にするのも恥ずかしいことなのです。しかし、すべてのものは光にさらされて、明らかにされます。明らかにされるものはみな、光となるのです。それで、こう言われています。

「眠りについている者、起きよ。死者の中から立ち上がれ。そうすれば、キリストはあなたを照らされる。」愚かな者としてではなく、賢い者として、細かく気を配って歩みなさい。時をよく用いなさい。今は悪い時代なのです。だから、無分別な者とならず、主の御心が何であるかを悟りなさい。酒に酔いしれてはなりません。それは身を持ち崩すもとです。むしろ、霊に満たされ、詩編と賛歌と霊的な歌によって語り合い、主に向かって心からほめ歌いなさい。そして、いつも、あらゆることについて、わたしたちの主イエス・キリストの名により、父である神に感謝しなさい。

[１] 「光」に変えられている私たち

エフェソの信徒への手紙を読むのも、今日を入れてあと2回です。今日は5章の1節から20節までを読んで頂きました。「随分具体的な生活のことが多くて教訓的なお話のような感じだなあ」と思うことがあるかも知れません。私もそう思ってしまいました。けれどもこの一連の言葉の中でキーワードがあるように思いました。それは「光」という言葉です。8節で「あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています。光の子として歩みなさい」とパウロは語っています。この「光の子」というのは、5章の1節で 「あなた方は神に愛されている子供ですから」と語ってますが、光の子とは、神様の愛の光を受けている者という人、と言っても良いと思います。これは誰か特別な人のことでしょうか？いいえ、皆さんのことです。あなたのことです。これは間違いがありません。パウロはこれまでも私たちが無条件に、ただキリストの恵みによって救われた者であることを例えば2章でも語っています。

‟クリスチャン”というと、周囲の人もそうですし、私たち自身もどこか「クリスチャンたるもの、かくあるべし」という固定観念を抱いていることがあると思います。品行方正で正義を愛し、弱い者の味方と言ったような感じでしょうか。しかしそれは良く考えると‟クリスチャンの条件”でも何でもありませんね。クリスチャンになった人がそういう性質を身に着けているというのは尊いと思いますが、そういったイメージが、却ってクリスチャンのイメージやに教会というものの敷居を高くしているということもあると思うのです。‟私たちとは違う人種”と。けれども、今日の箇所もそうですが、パウロはエフェソのクリスチャンたちに対して結構辛辣な言葉を語っています。「すべてみだらな者、汚れた者、また貪欲な者、つまり、偶像礼拝者は、キリストと神との国を受け継ぐことはできません。このことをよくわきまえなさい」と。そういう者たちが少なくなかったという現実があったからですね。そして驚くべきことに、そういう者たち、「おいおい…」と言いたくなるような者たちも含めてパウロは、「あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています。光の子として歩みなさい」と語っているのです。

恐らくこの手紙は、エフェソの人々が行った礼拝の中で読まれました。パウロはローマの獄中から手紙の形でこのようなメッセージを送ったのです。そしてそれが朗読された。彼らの心にはとても響いてきたと思います。「愚かな言葉」、ドキッ！「下品な冗談」、ドキッ！「偶像礼拝する者」、ドキドキッ！説教の言葉が突き刺さってきます。しかし、説教というものが常にそうであるように、彼らの罪をこれでもかと叩くことではなく、そのような「暗闇」の存在が、今「光」の存在に変えられている事実こそをしっかりと握り締めてもらいたい！とパウロは語っているのです。説教とは、神様の救いの言葉なのです。…どのようにして私たちは「光」に変えられているのか？―主イエス様の十字架の故です。2節でこのように語っています。「キリストがわたしたちを愛して、御自分を香りのよい供え物、つまり、いけにえとしてわたしたちのために神に献げてくださったように、あなたがたも愛によって歩みなさい。」　私たちが「愛」に歩むことが出来るとすれば、それは神の身分でありながら、己を十字架上で神の小羊としていけにえとなって下さったイエス・キリスト、その絶大な愛を頂いているからなのだと語っているのです。

［２］ イエス・キリストご自身という光

今日の話のエッセンスは、もう今お話ししたことに尽きると思うのですが、ではなぜパウロがこんなにも熱いハートで書いているかということを考えてみました。それは、「暗闇」という言葉で、信仰者が陥りやすい傾向があることを掘り当てているように思うのです。―それは何かと言うと、「他者への裁き」また「自分自身への裁き」ということを、案外安易にしてしまうということがあるように私は思うのです。それは、「わたしは、あなたは、神様に相応しくない」、「そんなに簡単に許してはいけない。許されてはいけない」、「自分が今このような仕打ちや悲しみを被っているのは自分の過去のせいだ」というようなこと…。しかし、それは「あなたの考え方」ですよね？「考え方」というのは相対的なものです。神様ではありません。でもそれがまるで神様のように絶対的な力になって、自分自身や誰かに対する武器になってしまう。逃げ場がなくなり、絶望という「暗闇」になってしまうことがあると思います。ある人がこんなことを語っていました。「自分は自分の親友になれる筈だ」と。「私は自分が、あれ、〇〇くん、どうかしちゃったの？と悲しむようなあまりしたくない。むしろ親友の自分から「お前はそれで行け！」と言われるようなことをやるようにしています」と。

「闇」というのは一つの「重力」のようなものなのかもしれません。下へ、下へと押し付ける力。それに対して「光」とは、高いところから射してきます。太陽の光や月の光、また灯台の光。どんな植物でも、太陽の光と水を受けることによって生きるのですね。この地球が素晴らしいのは、緑と海で覆われている惑星だということではないでしょうか。他の宇宙の空間では植物が生き生きと育たない。―「実を結ばない暗闇の業に加わらないで、むしろそれを明るみに出しなさい。…すべてのものは光にさらされて、明らかにされます。明らかにされるものはみな光となるのです」（5:13-14）。神様は、私という「器」の中に「光」をあふれさせて下さるのです。その「光」とは、イエス・キリストご自身という光です。14節の後半からお読みします。「それで、こう言われています。『眠りについている者、起きよ。死者の中から立ち上がれ。そうすれば、キリストはあなたを照らされる。』」―これは最初期の教会で歌われていた賛美ではないかという説が有力だそうです。バプテスマの時に歌われていたかもしれないと言われます。人は、キリストの光を受けて、新しく生まれ変わることが出来るのです！どんな年齢であろうが関係ありません。自らを全てキリストの光の中に明らかにしていく時に、下を向いていた心と生きざまが「お前、立ち上がっていいよ！」という天からの励ましを受けるのです。そこには私たちに対する、神の「全受容」があります。「赦し」があります。それこそ、あの弟子たちが、またパウロが受けた 「上からの光」です。私たちはそれを聖霊を通して頂きました。

［3］ 「霊に満たされ」、感謝の中を生きよう

16節。「時を良く用いなさい。今は悪い時代なのです」という危機感をパウロはこの当時の教会の者たちに語っていますが、人間の罪がある限り、貪欲がある限り、「良い時代」などと言う時代はないのかもしれないと思います。けれどもパウロは、この時の中で生きて行け、と言っていると思いますし、事実、彼の生涯の最期は殉教だったと伝えられます。この世はなお不信仰があるし、悲しいことも多いです。しかし、パウロは今日の最後の所でこう語っています。「酒に酔いしれてはなりません。それは身を持ち崩すもとです。むしろ、霊に満たされ、詩編と賛歌と霊的な歌によって語り合い、主に向かって心からほめ歌いなさい。そして、いつも、あらゆることについて、わたしたちの主イエス・キリストの名により、父である神に感謝しなさい。」

私たちは、酒に酔いしれるというよりも、「霊に満たされ」―聖霊をこの私という器の中に注ぎ込んで頂いて、賛美を歌いながら生きて行くことが出来る！と言っています。しかも、「いつも」「あらゆることについて」感謝しながら、です。「いつも」（anytime）、「あらゆることの中でも」（everything）。はたから見たら、おバカのように見えるかもしれない。クリスチャンは。でも、心の中は自由な筈です。なぜなら、「わたしは世の終わりまであなたと共にいる」（マタイ28:20）と言われたお方が、「いつも」「あらゆる場面の中でも」、同伴者として共に生きておられるからです。私たちの生涯は、このお方が共におられれば、最後の一瞬までお委ね出来ると思うのです。―「あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています。光の子として歩みなさい。」

お祈り致します。

主イエス・キリストの父なる神様、今日のみ言葉を感謝致します。様々な「暗さ」の中に私たちを引きづりこもうとする力を感じる時、どうかあなたにこの私自身を裸にしてあなたという光の中に飛び込むことが出来ますように。あなたは、主イエスという、いつも、どのような時も、変わらぬ救い主を与えて下さいました。そのお方のもとにあって、私たちも深いところで結びついて生きていくことが出来ますように。イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。